

# ひょうご伝説紀行

- 語り継がれる村・人・習俗 -

ひれ墓（ひれはか）  
悠久の流れを見下ろす墓



**伝説** ひれ墓（ひれはか）  
悠久の流れを見下ろす墓

**紀行** 褶墓と加古川下流の風景  
・加古川下流の景観  
・褶墓と日岡山古墳群  
・竜山  
・生石神社と石の宝殿

**関連情報** 用語解説  
参考書籍  
所在地リスト

## ひれ墓（ひれはか） 悠久の流れを見下ろす墓

1600年ほど前のことでしょうか。景行天皇（けいこうてんのう）は、播磨（はりま）に住む豪族（ごうぞく）の娘を妻にすることになりました。そのころは、結婚するときには男の人の方から、女の人のところへ出かけてゆかなければなりません。そこで天皇は旅のしたくをして、大和国（やまとのくに）から播磨国（はりまのくに）へと向かいました。

摂津国（せっつのくに）の高瀬（たかせ）という所まで来ると、舟で向こう岸へわたらなければなりません。天皇は、岸边にいたわたし守に「私を向こう岸へ渡してくれ」と言いました。ところがこれを聞いたわたし守は、「私はあなたの家来ではありません」とすまして言います。

「それはそうだが、どうにかわたしてくれ。」

「それなら、わたし賃をおはらいなさい。」

そこで天皇は、旅の時につけるかみかざりを舟に投げてやりました。その輝きで、舟の中はまぶしいほどになったそうです。こうして、景行天皇は舟に乗り、向こう岸へ着くことができたのでした。

天皇が明石まで来たころになって、娘ははじめて、天皇がやってくることを聞かされます。娘はすっかりおどろいてしまいました。いったいどうしてよいやらわかりません。困った娘は、海にうかぶ小島にかくれてしまいました。

一方天皇は、娘の住む加古（かこ）の松原（まつばら）までやってきましたが、娘の姿はどこにもありません。ちょうどその時、一匹の白い犬が、海に向かってはげしく吠えたたてました。

「あれはだれの犬か」と天皇がたずねると、家来のひとりが「娘が飼っている犬です」と答えました。

「それならば、娘はおきにうかぶあの島にいるにちがいない。」

島へわたった天皇は、優しい声で呼びかけます。

「この島にかくれている愛しい妻よ。どうか出てきておくれ。」

その声に、娘はようやく姿をあらわしました。船を連ねて島からもどった天皇は、加古の地に立派な宮を建て、結婚の儀式（ぎしき）をおこないました。

天皇と娘は、その宮で幸せに暮らしましたが、数年の後、娘は亡くなってしまいました。天皇は深く悲しみました。娘のなきがらをほうむるため、はるかに海を望む日岡（ひおか）の頂上に、立派な墓が造られました。

ところが娘のなきがらを墓へと運ぶために、船に乗せて川をわたっていたときのことで、とつぜん大きなつむじ風が吹いて船を転覆（てんぷく）させ、さかまく水は、そのなきがらを川底深くしずめてしまいました。天皇は悲しんで、娘のなきがらをさがさせましたが、見つかったのはくしを入れる箱と褶（ひれ）だけで、どんなにさがしても、なきがらは見つかりませんでした。

そこで、このくし箱と褶だけを墓にほうむったということです。そのためいつしか、この墓を「褶墓（ひれはか）」と呼ぶようになりました。

娘のことを思い出すたびに、天皇は娘が恋しく、また悲しくてなりません。

「これからは、娘のなきがらがしずんだこの川で取れるものは、食べるまい」と言って、その後、加古川でとれた魚を決してめし上がることはなかったということです。

景行天皇が娘を訪ねたときに立ち寄った場所は、今もいくつかの言い伝えがありますが、そのほとんどは長い年月の中で忘れられています。二人が暮らした宮の場所も、今ではどこかわからなくなっていました。



## 紀行「褶墓と加古川下流の風景」

### 加古川下流の景観



加古川の河口付近

加古川（かこがわ）に沿って海を目指すと、風景は幾度か大きく変わる。一度目は西脇市（にしわきし）あたり。それまで中国山地の山間を流れていた川が、一気に広々とした景色の中へ入ってゆく。広大な台地が広がる中流域である。次は小野市・三木市（みきし）と加古川市の市境あたり、東に正法寺山（しょうぼうじやま）、西からは坊主山（ぼうずやま）が迫り、平野がほとんどなくなる所である。ここから下は一気に視界が開け、流れも一段と穏やかな下流域に入る。

加古川の市街地を遠望するあたりからは、川幅が広がり、水量も豊かな大河の景観となってくる。河口付近こそ臨海工業地帯に囲まれてはいるが、夕日に染まる穏やかな瀬戸内海へ流れ込むあたりは、昔の面影を今にとどめていて「兵庫の貴重な景観」にも選ばれている。

かつてこの流れに沿って、さまざまな人と文化が往来した。



加古川下流の景観

### 褶墓と日岡山古墳群

加古川が、市街地に入るよりも少し上流の左岸に、独立丘陵の日岡山（ひおかやま）がある。『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』では、景行天皇（けいこうてんのう、応神天皇（おうじんてんのう）という説もある）がこの丘の上に立ち、「この国、丘と原野いと広くして、この丘を見るに鹿兒（かこ）のごとし」と述べたという。つまり日岡こそは、加古という名の発祥の地なのである。

日岡には古墳が数多く知られている。公園として整備された丘には、日岡山古墳群が広がっている。褶墓（ひれはか）を含め、合計5基の前方後円墳と3基の円墳からなる前期の古墳群と、およそ20基の円墳からなる後期の古墳群で、外観だけではあるが、いくつかは見学もできる。

褶墓は、この日岡山の頂上にある。

公園の駐車場から続く階段を上り詰めた頂上に、照葉樹林に覆われた古墳がひっそりと眠っている。

現在は、宮内庁指定の陵墓であるから、内部をうかがうことすらできない。測量図をもとに、全長80mの前方後円墳と言われているけれど、前方部は後世につけ足したものだという説もあるようだ。発掘調査をおこなうほかに、それを確かめるすべはないだろう。しかし、加古川下流に向かって見晴らしのきく頂上に立つと、むしろこの場所に、最も古い前方後円墳があるのは当然だろうと思える。加古川下流を支配する王であれば、いちばん目立つこの丘を墓所を選ぶだろう。風土記が語るように、大和の大王であった景行天皇が、妻問いに訪れたというのも、播磨地方の王が並々ならぬ力を保っていたことの証なのではないだろうか。「姫の遺体が川に沈んだ」という伝説の真偽はともかく、この古墳に葬られた人物が、加古川の水運なども深く関わっていたことも間違いないだろう。

褶墓の真実が明らかになる日は、まだまだ先のことだろう。それまでは、常緑の森に覆われて、川に沈んだ娘の伝説も秘やかに生き続けるに違いない。



日岡山陵への階段



日岡山陵



加古川方面を望む

## 竜山

褶墓から加古川を下ると、右岸に竜山（たつやま）が見えてくる。高さ100mにも満たない低山だが、「竜山石」の産地としてその名はよく知られている。この山に産する石は、石棺を造るための材料として古墳時代から採掘されていた。竜山石の石棺は近畿一円で広く用いられていたから、ある意味「ブランド品」と言える。

古墳の石棺は、大きさといい形といい手ごろな石材であったせいか、中世以降あちこちで、ほかの目的に転用された。今、東播磨で一番目につくのは、棺材に刻まれた「石棺仏」である。加古川市・高砂市（たかさごし）から小野市・加西市（かさいし）にかけて、竜山石の石棺仏は点々と分布している。

よく考えてみると、墓をあばいて石棺をこわし、仏像を刻むのであるから、坊さんたちもずいぶん乱暴なことをしたものだ、リサイクルと言え言えないこともない。

竜山では、今も石材の採掘が続いている。1500年以上も続く「石の山」は、また、人々の暮らしに生き続けている山でもある。



竜山



竜山付近の石切り場



生石山から竜山を見る

## 生石神社と石の宝殿



生石神社



生石神社と石の宝殿

この石を産む山で、石をご神体としているのが生石神社（おうしこじんじゃ）である。竜山の北にある生石神社は、その名の通り「石を生み出す山」を祭っている。ご神体となっている「石の宝殿（いしのほうでん）」は、謎を秘めた石として知る人も多い。『播磨国風土記』では、「原の南に作石あり。形、屋の如し。一中略一 伝へて言えらく、聖徳の王の御世、弓削の大連の造れる石なり」と伝えているが、この当時にはすでに、はっきりとしたことがわからなくなっていたのではないだろうか。

その形などから、7世紀ごろに墓として造られたのではないとも言われるが、これほど巨大なものを本当に動かせると思っていたのだろうか。古墳や石棺作りにたけた古代の石工たちが、そんなことがわからなかったとは思えない。しかし一方で、この巨石の根元は、明らかに切り離すことを目ざして、深くえぐられているのである。

墓か、それとも巨大な記念物か。どこかへ運ぶつもりだったのか。造らせたのはだれなのか。すべてが謎のまま、石は立ち続けている。

石の宝殿の裏山からの眺望は素晴らしい。実はこの山は、頂上まで続く巨大な1個の岩盤なのである。そこに刻まれた階段を、滑らないよう一歩ずつ確かめながら登ると、5分ほどで東屋のある頂上に至る。

頂上からは360度のパノラマである。竜山から西へ続く山塊と、石切場のようすが一目で見渡せるだけでなく、はるか北播磨の山地から加古川下流域の平野、瀬戸内海（せとないかい）までが視界に入る。宝殿を刻んだ石工たちが見た風景を思って、しばしの間立ちつくしていた。



石の宝殿



石の宝殿

## 用語解説

### 【加古川】かこがわ

兵庫県の南部を流れる一級河川。延長96km、流域面積1730平方キロメートルをはかる県下最大・最長の河川である。但馬・丹波・播磨の三国が接する丹波市青垣町の粟鹿山（あわがさん、標高962m）付近が源流で、途中小野市、加古川市などを流れ、加古川市と高砂市の境で播磨灘に注ぐ。

加古川の水運は、古代から物流を担う経路であったと考えられ、特に日本海に注ぐ由良川水系へは峠を越えずに到達できることから、「加古川－由良川の道」とも呼ばれて、日本海側と瀬戸内側を結ぶ重要なルートとされている。

### 【兵庫の貴重な景観】ひょうごのきちょうなけいかん

兵庫県の健康生活部環境局自然環境保全課が選定した、『改訂・兵庫の貴重な自然 兵庫県版レッドデータブック2003』で選定された景観。ここでは景観を、「視覚的な美しさと緑や自然の質（生態系）を包含した概念」としてとらえており、景観資源的価値と自然的価値の両面から評価されるものを貴重な自然景観とし、A～Cランクで合計207か所が選定されている。

### 【日岡山】ひおかやま

加古川市日岡に所在する独立丘陵。加古川に面し、標高は51m前後である。山頂からふもとにかけて、日岡古墳群が広がっている。『播磨国風土記』によると日岡の語源は、景行天皇（応神天皇とする説もある）がこの丘に登ったとき、鹿が「比々（ヒヒ）」と鳴いたためだという。現在一帯は、公園としてさまざまな施設が整備されている。

### 【景行天皇】けいこうてんのう

第12代の天皇。記紀には、全国を征討した天皇として描かれており、皇子ヤマトタケルによる熊襲、蝦夷の征討などの記述がある。143歳まで生きたとされるなど、伝説的要素が強く、史実性は確かではない。

### 【応神天皇】おうじんてんのう

第15代の天皇。4世紀末から5世紀初頭ころとされる。記紀では、この時期に渡来人と新技術の伝来があり、大規模な開発がおこなわれたとしている。陵墓に比定されている誉田御廟山古墳（こんだごびょうやまこふん）は、全長425mをはかり、墳丘の長さで第2位、体積では第1位の古墳である。

### 【日岡古墳群】ひおかこふんぐん

日岡山山頂からふもとにかけて分布する古墳群。主として古墳時代前期～中期にかけて築造されたと推定されている。日岡山頂には、陵墓として管理されている裾墓古墳（日岡陵）がある。全長80mの前方後円墳で、公開されている測量図からは整った古式前方後円墳とされているが、明治時代初頭に修築した際、円墳であったものに前方部を付け加えたという説もある。古墳時代前期の加古川下流地域を考える上で、重要な古墳群である。



**【照葉樹林】**しょうようじゅりん

温帯に見られる常緑広葉樹林の一つ。森林を構成する木に、葉の表面の光沢が強い樹木が多いのでこの名がある。本来本州の南西部以南では、照葉樹林が極相林（きょくそうりん、その地域で自然の変遷に任せるとき、最終的に到達する森林の姿。その地域の環境に適合して、長期にわたって安定する）であるが、開発や植林を通じてまとまった照葉樹林はほとんどが消失し、一部の山地や寺社の鎮守の森などで断片的に見られるだけとなっている。

**【陵墓・陵墓参考地】**りょうぼ・りょうぼさんこうち

一般に、天皇・皇族の墓を総称して陵墓といい、皇族の墓所である可能性がある場所を陵墓参考地と呼ぶ。陵墓および陵墓参考地は宮内庁によって管理されており、研究者などが自由に立ち入って調査することができない。一部の古墳では、比定される天皇と古墳の年代に明らかな相違が見られ、当該天皇陵であることに疑義が出されている。考古学的には、古墳の名称はその古墳が所在する地名（字名など）を用いることが原則であり、〇〇天皇陵という呼称は用いない（例：仁徳天皇陵＝大仙（だいせん）古墳、応神天皇陵＝誉田御廟山（こんだごびょうやま）古墳など）が、「仁徳天皇陵古墳」といった使い方をする例もある。

**【褶】**ひれ

比礼・領巾とも書く。

古代、女性が着用したスカーフの一種。薄い細長い布で作られ、女性が首から肩にかけてめぐらせ、長く垂らした。装飾的な効果だけではなく、これを振ることで破邪の呪力があるとされていた。中世以降はしだいに使用されなくなった。

**【竜山石】**たつやまいし

兵庫県の播磨地方南部に産出する、流紋岩質溶結凝灰岩（りゅうもんがんしつようけつぎょうかいがん）。高砂市竜山（たかさごしたつやま、標高92.4m）付近を中心に採掘されていたため、「竜山石」と呼ばれる。古墳時代から、石棺（せっかん）用の石材として用いられている。加西市長（おさ）、高室（たかむろ）などでも近似の石材を産し、同様に利用された。

**【石棺仏】**せっかんぶつ

石棺の部材を利用して作られた石仏。石棺の蓋（ふた）のような板状の石材をそのまま利用して、浮き彫りで石仏をあらわしたものが多い。加古川市、高砂市、小野市、加西市など、加古川流域西部に多く分布する。13～16世紀に製作されたものが多いと考えられている。

**【石棺】**せっかん

埋葬する遺体を納めるために作られた、石製の棺。石を組み合わせて作る場合と、一個の石をくりぬいて作る場合がある。日本での最古の例は縄文時代後期にさかのぼる。

古墳時代には、古墳に埋葬するためのさまざまな形式の石棺が製作された。その主要なものには、割竹形石棺、舟形石棺（ともに古墳時代前期）、長持形石棺（中期）、家形石棺（後期）がある。

## 【生石神社・石の宝殿】おうしこじんじゃ（「おおしこ」とも表記することがある）・いしのほうでん

『生石神社略記』によれば、崇神天皇（すじんてんのう）の代に創建したとされ、背後の宝殿山山腹にある石の宝殿を神体として祭る。

石の宝殿については、オオナムチの神とスクナヒコナの神が、出雲からこの地に来た際に、国土を鎮めるため、夜に石の宮殿を造営しようとしたが、阿賀の神の反乱を受けて造営が間に合わなかったという伝承（『生石神社略記』）、聖徳太子の時代に弓削大連（ゆげのおおむらじ、物部守屋（もののべのもりや）のこと）が造ったという『播磨国風土記』の伝承などがある。古墳時代終末期の石棺や横口式石槨（せきかく）などとの関係を指摘する説、石棺の未製品とする説、火葬骨の骨蔵器外容器とする説、供養堂とする説などがあるが、製作年代については、7世紀代と考える人が多いようである。

## 【播磨国風土記】はりまのくにふどき

奈良時代に編集された播磨国の地誌。成立は715年以前とされている。原文の冒頭が失われて巻首と明石郡の項目は存在しないが、他の部分はよく保存されており、当時の地名に関する伝承や産物などがわかる。

## 【聖徳の王】しょうとくのおおきみ

聖徳太子（574～622）のこと（『播磨国風土記』印南郡の記述）。

## 【弓削の大連】ゆげのおおむらじ

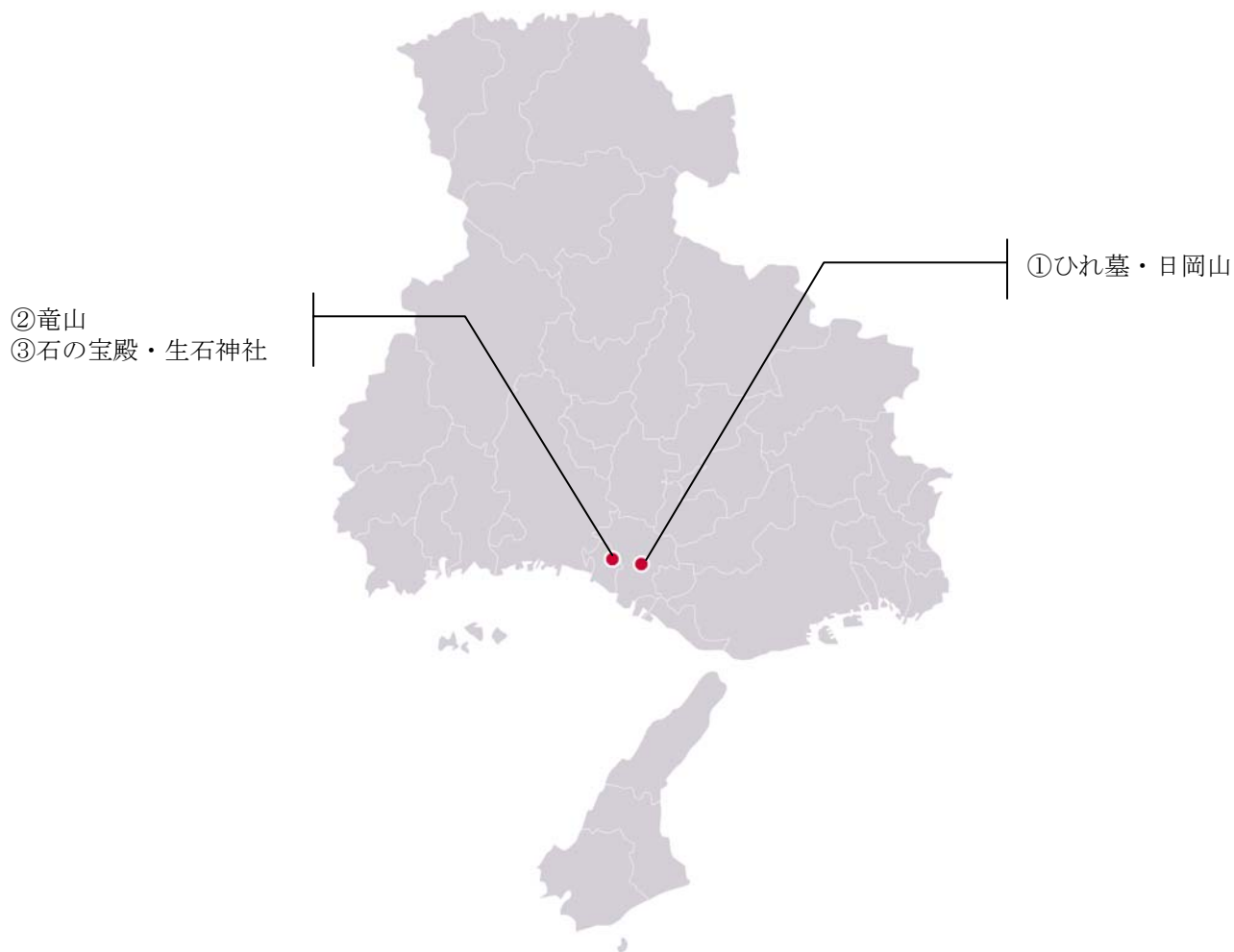
物部守屋（？～587）のこと。仏教を排斥して蘇我氏（そがし）と対立し、滅ぼされた。

## 参考書籍

	書籍名	刊行年	編著者名	発行者
伝説	伝説の兵庫県	2000	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター
歴史・文化等	日本古典文学大系2 播磨国風土記	1958	秋本吉郎 校訂	岩波書店
	兵庫のふるさと散歩 1. 神戸・阪神・三田編	1978	兵庫のふるさと散歩編集委員会	神戸新聞出版センター
	増補改訂国史大系 日本書紀前篇	1981	黒板勝美編	吉川弘文館
	兵庫県大百科事典(上・下)	1983	神戸新聞出版センター	神戸新聞出版センター
	日本の古代遺跡3 兵庫南部	1984	櫃本誠一・松下勝	保育社
	加古川市史第1巻	1989	加古川市史編さん委員会	加古川市
その他	史蹟播磨國石乃寶殿生石神社略記 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社
	日本三奇 史跡石乃宝殿 ※参拝者用資料	不詳	生石神社	生石神社



## 所在地リスト



①ひれ墓・日岡山	加古川市加古川町大野
②竜山	高砂市竜山
③石の宝殿・生石神社	高砂市阿弥陀町生石171

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

## ひょうご伝説紀行

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館

〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 TEL 0792-88-9011

第1刷 2007年4月1日